

三月前期の西南ドイツ自由主義の二重性とその限界

——H・ゼダティス『西南ドイツにおける自由主義と手工業』を中心として

手塚真

はじめに

一 方法的検討

(1) L・ガルの自由主義論批判

(2) マクファーンソンの市場社会論批判

二 西南ドイツ自由主義の歴史的性格

(1) 『国家学辞典』に示される二重性

(2) 自由主義と手工業

三 三月革命期における自由主義

小括

はじめに

近代ドイツ史のなかで自由主義が果たした役割の重要性は、

三月前期の西南ドイツ自由主義の二重性とその限界

三月革命や第二帝制についての研究のなかで、くり返して指摘されている<sup>(1)</sup>。そうした指摘によれば、ドイツ自由主義は、その脆弱性のために、封建的絶対主義的な旧体制の解体と近代社会の創設とを指向する一八四八―四九年の国民的運動を挫折させ、プロイセン主導による「上からの近代化」<sup>(2)</sup>にドイツ統一をゆるすことになる。こうして成立する第二帝制は、封建的な諸関係を廃絶することなく、「似而非ボナパルティスム」と特徴づけられる社会構造をとることになり、その矛盾は第二次世界大戦にいたるまで克服されることがない。このように自由主義は、ドイツ社会の近代化の方向が決定されるときに重要な役割を演じている。しかしわが国においては、ドイツのこの自由主義が、その歴史的な役割の重要性にもかかわらず、それ自体

として研究の対象とされることはあまりなかった。この理由としては、自由主義の問題がドイツの場合、著しく固有の性格をもって現われており、しかもこの問題それ自体が多様性と多面性をもっている点に求められるであろう。

そもそも、西欧の近代史を特徴づけている自由主義は、それ自体としてきわめて包括的な概念であり、その一義的な規定は存在しないとさえ言える。ただ一般的には次のように言うことができよう。市民革命と産業革命とを契機として確立された西欧の社会、とくにイギリス社会は、政治上、経済上の自由を最大限に実現する方向にむかったのであり、こうした点から十九世紀は自由主義の時代とよばれ、とくにイギリスは自由主義の祖国とよばれる。もちろん、自由主義は歴史的に発展してきたのであり、その起源は封建制の特権的階層的な社会秩序に対する市民階級の抵抗のうちに見出される。従って、市民階級の支配的地位の獲得は、資本主義社会の確立とともに自由主義の勝利の画期とみなされる。<sup>(3)</sup>

このような歴史的な性格をもつ西欧の自由主義に対して、ドイツの自由主義の特殊性・脆弱性が問題とされる場合、それは如何なる意味においてであるのか。わが国とちがって、ドイツ国内においては、自由主義についての研究は古い歴史をもっており、とくに一九五〇年代以降には、ドイツ自由主義論争ともいふべき論争が展開された。戦争責任問題とのかかわりにおいてドイツの政治的、経済的な後進性が一般的に問われた状況の下

で、主に政治的後進性を条件づけたものとしてドイツ自由主義の性格が問題にされたのであった。この論争の到達点はブスマン Walter Bümann の研究に見出される。<sup>(4)</sup> 彼は、ドイツ自由主義の性格を究明する場合の留意事項として、一八七一年以前の自由主義運動が決して統一的ではなく、むしろ分裂的であること、すなわち、プロイセンの政治に妥協してゆく温穩派とともに、そうした妥協を排除する急進派が存在したことを指摘し、まさにこうした二派の対立関係がドイツ自由主義に課せられた任務の特殊性の反映であるとみなした。つまり、ドイツ自由主義が「自由」とともに「統一」を実現しなければならぬという点に、彼は西欧の自由主義に対するドイツ自由主義の個有的問題を見出したのであり、換言すれば、ドイツ自由主義の脆弱性の原因を諸邦への分裂という政治的後進性のなかに求めたのである。

このような問題を踏まえつつ、最近ではそうした比較史的な研究とはやや違って、ドイツ自由主義の性格をより内在的に解明し、それによって自由主義がドイツの近代史上で果たした役割の意義を否定的にばかりでなく、積極的にも評価しようとする傾向が現われてきている。このような傾向はガル Lother Gall やグーゲル Michael Guegel を中心に押し進められている。これに対しては、モムゼン Wolfgang J. Mommsen が、彼らの歴史的資料の評価の仕方の一面性を指摘するとともに、この傾向のなかに初期自由主義の政治的プログラムを理想化するロマ

ン主義的解釈があることを指摘し、これを批判している。<sup>(3)</sup>

自由主義をめぐる以上のような論争のなかで、一九七七年にヘルリン自由大学の歴史学科に学位論文として提出され、つい最近刊行されたゼダティス Helmut Sedatis の研究『西南ドイツにおける自由主義と手工業』<sup>(6)</sup>は、明らかにそうした傾向のひとつをなす。しかし、彼の研究の特徴は、三月前期の自由主義の社会的基盤としての手工業者の利害関心に注目しつつ、この自由主義の社会思想的な意義を説明しようとしている点にある。ドイツ自由主義はこれまでもっぱら政治史的観点から研究されてきたのであり、それに対しこの自由主義を社会思想的観点から検討するゼダティスの研究は、新しい視角を呈示するものとして注目に値いする。本稿は、ゼダティスのこの研究の新しい方向性に着目し、これを紹介するとともに、それを踏まえて、これまでほとんど扱われてこなかった三月前期の自由主義の社会思想としての意義を検討する。というのには、ドイツ自由主義史はこの国における封建制の解体と資本主義の発展・確立との重畳的な過程に対応し、かつ、この対応の仕方はこの国の近代化の方向を決定する場合に重要な意味をもったのである。ドイツ自由主義がかかる過程を如何に捉え、またそれに対して如何なる方向を追求したかが、本来、問題となるべきであるからである。

(1) 矢田俊隆「ドイツ三月革命と自由主義」『近代革命の再検討』年報政治学、一九六二年、末川清「三月革命期におけるライン自由

三月前期の西南ドイツ自由主義の二重性とその境界

派の政治的性格」桑原武夫編『ブルジョア革命の比較研究』筑摩書房、一九六四年、白石正夫「ドイツ自由主義研究序説」京都大学『法学論叢』八巻五号、一九六九年、望田幸男『近代ドイツの政治構造』ミネルヴァ書房、一九七二年、柳沢治「ドイツ革命（一八四八—一九九年）と市民層の分裂」『思想』六一三号、一九七五、千代田寛「ドイツ自由主義における政治と思想」広島大学文学部『紀要』特輯号、一九七五年、などを参照。

(2) 「似而非ポナパルティスムス」の内容については、松田智雄「ドイツ的経済形態」『経済学大辞典』Ⅱ東洋経済新報社、一九五五年、五九一—二〇一頁、大野英二・住谷一彦「ドイツ資本主義分析と『資本類型』」『思想』四七六号、四八八号、一九六四、六五年、を参照。

(3) 『総合世界歴史事典』時事通信社、一九五五年、『経済学大辞典』Ⅲ東洋経済新報社、一九五五年、『現代経済学辞典』青林書院新社、一九七九年の「自由主義」の項目を参照。

(4) Walter Bugmann, Zur Geschichte der deutschen Liberalismus in 19. Jahrhundert, *Historische Zeitschrift*, Bd. 186, Heft 3, 1958, S. 527 f.

(5) Wolfgang J. Mommsen, Der deutsche Liberalismus zwischen "Klassenloser Bürgerschaft" und "Organisierter Kapitalismus", *Geschichte und Gesellschaft*, 4. Jg. Heft 4, 1978, S. 77 f.

(6) この本の原題は次の通りである。 Helmut Sedatis, *Liberalismus und Handwerk in Südwestdeutschland, Wirtschaftsgesellschaftskonzeptionen des Liberalismus und die Krise des*

一 方法論的検討

(1) L・ガルの自由主義論批判

資本主義に対する自由主義の關係については、大別して二つの対立的な見解が認められる。一方は、自由主義を資本主義と結びつけ、これを擁護するイデオロギーとしての側面を強調する。他方は、これに対して、自由主義のなかに含まれているあらゆる社会において実施さるべき普遍的・民主主義的な要素を強調する。<sup>(1)</sup> 前者の場合、自由主義はブルジョア階級を担い手とし、自由主義の危機はこの階級の危機と同一視される。これに対し後者では、個人の自由や立憲民主制という自由主義の理念は、歴史的にはたしかにブルジョア階級によって発展させられたものではあるが、しかし理念それ自体は、本来、特定の階級・階層の利害関心とはかかわりのない普遍的な政治理念であり、従ってまた特定の経済制度と結びつくものではないとみなされる。こうした対立的な見解のなかで、その二者択一を拒否し、更にこうした見解に修正をせまっているのが、L・ガルの自由主義把握である。ゼグティスはガルの見解をこのように積極的に評価する。

では、ガルの自由主義論の特徴はどこにあるのか。それは彼が、普遍的理念を指導原理として解放をめざす自由主義が資本主義の発達によって単なるブルジョア階級のイデオロギーに変

質・墮落する、と把握する点にあるだろう。ガルは、自由主義の社会的な期待モデル *soziales Erwartungsmodell* に注目し、それが時期によって異なることを指摘する。三月前期の立憲運動を思想的に支えた自由主義は、社会的な期待モデルとして「無階級市民社会」*Klassenlose Bürgergesellschaft* をもち、これとの関連において普遍的理念を展開した。資本＝賃労働關係が顧慮されていないという点において、この自由主義は資本主義の旗手ではありえない。ブルジョア階級がその利害関心にとられずに、そうした普遍的理念を展開したのでもない。しかし、資本主義の著しい発達をみた三月以降期、とりわけ第二期の自由主義はブルジョア階級の利害関心と結びつき、これを擁護するイデオロギーに変質している。この自由主義の社会的な期待モデルは「市民的階級社会」*bürgerliche Klassengesellschaft* である。社会的な期待モデルのこうした変化が意味することは、ガルの場合、資本主義に対する自由主義の關係の変化、つまり資本主義とは本来無縁である自由主義が次第にそれとの結びつきを強める傾向があるということである。<sup>(2)</sup>

ガルのこうした自由主義把握に対して、ゼグティスは、一方で資本主義に対する自由主義の二面的關係が打ち出されている点において、これを積極的に評価し、他方で三月前期の自由主義の性格の把握に関しては、これに疑問を呈する。ガルの場合、三月以降期の自由主義はブルジョア的なものと規定され、資本主義とのその対応性が強調されているのに比べ、三月前期

の自由主義の経済政策的な姿勢・方向性がほとんど指摘されない。そこでゼグティスは次のように問う。

「一、三月前期の自由主義の社会的基盤は見出されるか。

二、三月前期の自由主義は、その包括的な解放理想[*emanzipatorisch*]に対応する社会経済的構想を展開したか。」

結論だけを先取りすれば、ゼグティスの見解はこうである。

三月前期の自由主義はブルジョア階級の立場に立ってはいない。この自由主義はその社会的基盤を中産身分的の社会層 *Mittelstand* に求めた。これは、当時人口の圧倒的部分を占めた小経営所有者——手工業親方、小売商人および農民——であり、こうした社会的基盤は自由主義の経済政策・社会政策に小ブルジョア的な刻印を与えている。<sup>(4)</sup>

三月前期の自由主義に関しては、従来、この自由主義の理論・政策が政治的には自由主義的であるが、経済的には保守的であるので、「政治的自由主義と経済的自由主義との不一致」が問題とされてきた。<sup>(5)</sup> ガルは「無階級市民社会」という社会的な期待モデルを著しく伝統的社会に接近させることによって、すなわちそれを「家父長制的な土台の上に、『中位』の存在者を工業以前の、職業身分制的に組織してできあがる、後向きに編成される中産的の社会 *mitelständische Gesellschaft*」と特徴づけることによって、この自由主義の「不一致」を説明しようとする。それに対してゼグティスは、自由主義の理論・政策に保守性が認められるとすれば、それは、この自由主義の社会的基盤

### 三月前期の西南ドイツ自由主義の二重性とその限界

盤である手工業者に代表される中産層の保守性の反映であると把える。というのは、手工業者層の保守性は、三月革命の研究のなかでしばしば指摘される問題であるからである。<sup>(7)</sup> だがゼグティスは、手工業者が保守的傾向をもつとはいえず、経済的な発展を全体として否定しているわけではないとみる。なぜならば、自由主義は「工業化の傾向に対しては反動的に対応している」<sup>(8)</sup> が、伝統的な手工業の経営的向上に対しては、むしろこれを促進しようとしているのであり、ゼグティスは自由主義のこうした姿勢を手工業者のそれと同一視するからである。<sup>(9)</sup>

三月前期の自由主義が資本主義に対して保守的・反動的になるのは、ゼグティスの場合、この自由主義が手工業者の利害關心を擁護するからである。このこと自体は、この自由主義の経済的保守性を意味するであろうか。むしろそここそ、資本主義とは異なる発展の方向性が示されているのではないか。もしそうだとすると、政治的自由主義とその経済的な方向性とは「不一致」ではなく、むしろびったり一致することになる、とゼグティスは指摘する。つまり彼は、三月前期の自由主義を、資本・賃労働関係の展開をまだ十分にみていない手工業者の一般的な社会に対応する思想として把え、そしてこの思想によって方向づけられる経済政策は、本来、資本・賃労働関係の展開を促進するのではなく、階級のない平等な市民の社会の形成を指向するものであると考える。ガルは「無階級市民社会」を伝統的社会に接近させて理解したが、ゼグティスはそれを伝統的

社会から区別するとともに、更に資本主義社会からも区別して理解するのである。

(2) マクファーンソンの市場社会論

伝統的社会と資本主義社会との両方から区別される「無階級市民社会」とは、一体、どのような社会であるのか。ゼグティスは、カナダの学者マクファーンソン C. B. McPherson が自然法的所有理論と関係づけて提示している市場社会論に注目しつつ、市場社会としての「無階級市民社会」の性格を検討している。

近代的な所有権はロックによって確立されたといえる。ロックは、人が自己の人格の所有者であるという点から、自己の労働の成果・労働生産物に対する所有権を自然権として確立したのである。自然権としての所有権は経済的な平等を保証するものではない。むしろ、貨幣の介在のため経済的な不平等の発生が不可避であると、ロックは考えた。従って彼の見解は、マルクスによって、「封建社会と対立するブルジョア社会の権利觀念の古典的表現<sup>(11)</sup>」との評価が下されている。

マクファーンソンは、ロックの所有理論が労働生産物の所有権を理論化することばかりでなく、更に「労働力」の所有権を基礎づけることを課題にしている<sup>(12)</sup>。「労働力」の所有権、換言すれば「労働力の商品化」は資本主義的生産を特徴づけるものである。従って、労働生産物の所有権と労働力の所有権とは、ともに自然法的に基礎づけられる所有権ではあるが、その

意味するところは著しく異なる。市場に労働生産物だけが現われるか、あるいは労働生産物とともに労働力が現われるか、この相違によって、市場を中心にして形成される社会の構造はちがってくる。マクファーンソンは「労働力の商品化」がある場合の社会を「所有市場社会」possessive market society、それがない場合には「単純市場社会」simple market society とよび、二つを区別するとともに、ロックの所有理論の背景にある社会像が前者に接近していることを論証している。

さてゼグティスは、「単純市場社会」が「無階級市民社会」、「所有市場社会」が「市民的階級社会」にそれぞれ対応するとみなす。従って、社会的な期待モデルの相違としてガムが二つに区別した自由主義の問題は、ゼグティスの場合、所有権の確立の仕方の問題として把握直される。つまり「単なる所有の解放をめざすか、あるいは所有という物質的基礎にたつて人間の解放をめざすか<sup>(13)</sup>」が問題となる。「単なる所有の解放」とは、労働生産物と労働力との両方の所有権・譲渡権の確立を意味する。自由主義がこうした方向の解放をめざす場合には、資本・賃労働関係の発展が促進され、この自由主義はブルジョア階級のイデオロギーとなるであろう。他方、「所有を基礎にした人間解放」とは、労働生産物だけの所有権・譲渡権の確立を意味するのであり、これはいわば所有者による所有者の収奪を否定するものである。このような解放をめざす自由主義はブルジョア階級のイデオロギーとはならない。だがこの自由主義は、所

有の維持・保持を重視しようとするならば、その場合には歴史的な現実注目しなければならぬし、またそれによって規定されなければならない。かかるものとして現在はずでに大幅に形骸化している、かつてのツンプト制が注目され、そこにおいて手工業的経営と労働生産物が保たれていた事実が重視される。つまり、ツンプトの原理を土台とする階級のない平等な社会の実現、これが手工業者層を社会的基盤とする自由主義がめざした方向である。従って、「所有を基礎にした人間解放」をめざす三月以降期の自由主義は、この場合、ツンプト制の復活・強化をはかる手工業者運動と結びついた三月前期の自由主義から区別されなければならない。しかしまた同時に、所有の維持、保全を重視する点において、両者は決して対立するものではなく、むしろ逆に共通性・連続性をもつ。ゼグティスは、自由主義が単なるイデオロギーに止まらずに更に人間の普遍的解放の思想たりうる条件として、それが手工業者運動と親和的である場合を考えるのである。

ところでマクファアソンは、「所有市場社会」を近代資本主義社会と等置し、この概念を歴史的な実体概念としている。それに対し「単純市場社会」は、彼の場合、さし当り「独立生産者とその生産物だけを市場で交換する社会」<sup>(14)</sup>として想定されているが、これはむしろ「歴史上のある社会であるよりも、近代の完全に発達した市場社会の諸特徴をより明確にするための分析上の補助手段」<sup>(15)</sup>として規定されている。とするならば、この

二つの社会の間の関係は、一方から他方への発展の関係としてみなすことはできないであろう。

しかし、ゼグティスはその発展の関係を強調する。「単純市場社会モデルは市場社会の未発達な形態であり、市場社会の胎内で社会経済的な発展過程が進行し、この過程が単純市場社会を所有市場社会へ移行させる」<sup>(16)</sup>と、彼は把握する。換言するならば、「単純市場社会」と「所有市場社会」とは、ゼグティスの場合、それぞれ別個の独自の解放構想によって獲得される社会モデル・理念であると同時に、それに止まらずに更に両者はともに歴史的に存在する現実の市場社会そのものとして扱われ、前者は後者へと発展するものとしてみなされている。かくしてゼグティスは、自由主義の性格を規定する上で、「自由主義者の観念のなかに、どちらのモデルに近い要素が認められるか、またどの程度認められるか、そしてまた移行過程がどの程度認識され、如何に判断されているか」<sup>(17)</sup>が重要な問題であると、次にこうした視点から西南ドイツ自由主義の具体的な分析を行なう。

(1) ゼグティスは前者の立場にたつものとして次のような研究を挙げている。H. J. Laski, *The Rise European Liberalism*, London 1928. H. Grebing, *Geschichte der deutschen Parteien*, Wiesbaden 1962. その他に東独における自由主義研究。また、後者の立場にたいのは次のようなものである。F. Watkins, *The Political Tradition of the West. A Study In the Development of Modern*

- Liberalism, Cambridge/Mass. Th. Schieder, Die Krise des bürgerlichen Liberalismus, in ders., *Staat und Gesellschaft in Wandel unser Zeit*, München 1970, S. 50-88.
- (2) Lothar Gall, Liberalismus und „bürgerliche Gesellschaft.“ *Historische Zeitschrift* Bd. 220, 1975, S. 324-356.
- (3) H. Sedatis, S. 21.
- (4) マクティスは、自由主義の社会的基盤を手工業者層とみなす場合、James J. Sheehan, *Liberalism and Society in Germany 1815-1848, The Journal of Modern History* Bd. 45, 1973, p. 583-604, Ders., *Liberal Thought and Action in Vormärz*, in H.-U. Wehler (Hg.), *Sozialgeschichte Heute*, Göttingen 1974, S. 162f. などの根拠をこぼす。だが、シェーンは手工業者層を自由主義の社会的基盤として明確に打ち出していない。彼の力点は、自由主義の社会的基盤が広範囲にわたっていることを示すことにあり、その限りで彼は自由主義の性格をあくまでも示している。
- (5) Vgl. Werner Conze, Das Spannungsfeld von Staat und Gesellschaft in Vormärz, in ders. (Hg.), *Staat und Gesellschaft in deutschen Vormärz 1815-1848*, Stuttgart 1962, S. 242.
- (6) Lothar Gall, a. a. o., S. 353.
- (7) Vgl. Rudolf Stadelman, *Soziale und politische Geschichte der Revolution 1848*, München 1948, (大内宏一訳『一八四八年のドイツ革命史』創文社、一九七八年) Leonard Krieger, *The German Idea of Freedom*, Chicago 1957.
- (8) H. Sedatis, S. 26.
- (9) 柳沢治氏は、封建制の解体過程と産業革命とが重畳的に進行する三月革命期の小ブルジョア層の意義を次のように指摘している。「三月革命期の都市小ブルジョアの『反営業の自由』の立場は、資本制生産の自由な展開あるいは商品生産の自由な展開に対立し、小生産をこれに対置する限りで、基本的に反動的であった。しかし、それは決して資本制の全面的否定——その限りでユートピア的社会主義の可能性をもつ——でもなかったし、逆に旧い(中世的な)シンクノットの復活を意図したものでなかった。むしろ、それは工場制、資本制の発展を一定の条件の下でしかし大幅に承認しつつ、イマヌント制なる名の下に特定分野を手工業経営に確保し、工場制の競争から守られつつ、経営的向上の実現をめざす、すなわて小ブルジョア(→ブルジョア)的な本質を有していた(小ブルジョアの発展の志向性と『反動性』との結合)。」柳沢治「三月革命期における小ブルジョアとその社会意識」『思想』六四五号、一九七八年、一一一ページ。
- (10) C. B. Macpherson, *The Political Theory of Possessive Individualism, Hobbes to Locke*, London 1962, p. 46-70.
- (11) カール・ポルトス『剰余価値学説史』全集二十六巻「大月書店」四六四ページ。
- (12) マクティスは「労働力」という表現を用いずに、単に「労働」としている。マクティスがそれを言い換えている。この言い換えは適切である。
- (13) H. Sedatis, S. 33.
- (14) C. B. Macpherson, op. cit., p. 48.



(15) *ibid.*, p. 47.

(16) (17) H. Sedatis, S. 29.

## 二 西南ドイツ自由主義の歴史的性格

(1) 『国家学辞典』に示される二重性

ロテック Karl von Rotteck とヴェルカー Karl Theodor Welcker の二人に於いて編纂された『国家学辞典』(Staatslexikon oder Encyclopädie der Staatswissenschaften 15 Bde. und 4 Supplement-Bde., Altona 1834-48)は、三月前期の西南ドイツの自由主義者たちが自由主義のバイブルのように見なしたものである。ゼダティスはこの『国家学辞典』(以下『辞典』と略す)を取り上げ、その分析を通して三月前期の西南ドイツ自由主義の歴史的性格を説明する。なお、『辞典』の執筆者は六九人に及ぶが、その中心は編纂者であるロテックとヴェルカーである。従ってゼダティスが問題にするのはまずこの二人であるが、彼ら以外では Oppenheim, W. Schulz, Abt, R. v. Mohl, G. v. Struve, K. Mathy が取り上げられている。営業制度の問題に関しては Mathy とその師である K. H. Rau (『辞典』の執筆者ではない) がとくに注目されている。以下、ゼダティスが辞典に示される自由主義の性格を、とくに資本主義の理解の仕方の問題とかかわらせて、如何に整理しているかを試してみよう。

『辞典』では所有権が自然法思想によって理論化されている

三月前期の西南ドイツ自由主義の二重性とその限界

が、その場合、自分で労働し、その生産物を自ら所有する、いわば独立生産者の「労働による所有」が唯一の所有権として確立されている。かかる労働生産物の所有権だけを前提にする社会は、先の市場社会のカテゴリーを用いれば、「単純市場社会」であり、『辞典』は社会をそのようなものとして構想している。ところで「単純市場社会」は、それ自体としては完成された社会ではなく、労働力の所有権・労働力の商品化も内在させる「所有市場社会」すなわち資本主義社会へと発展し移行しなければならぬ。しかし『辞典』においては、『単純市場社会』はそうした方向に発展するものとしてでなく、むしろそれ自体として完成されたものとして指示されている。「単純市場社会」に対する『辞典』のこうした姿勢は、この社会の経済的な発展の方向が理解されていないことを示すのか。否、そうではなく、こうした姿勢は政治的な判断によって積極的に選ばれているのである。「民主主義にふさわしいのは財産のより大きな平等と可動性」であり、「中小の所有者が市民的な秩序を保障する」<sup>(1)</sup> といった判断が、「単純市場社会」の資本主義社会への移行を否定させている。

経済的に平等な市民の社会である「単純市場社会」の理想化は、貧富の差をとまなうすべての社会の批判を意味する。事実、『辞典』では、「封建貴族と貨幣貴族」、伝統的な貴族と生起しつつある資本家、彼らがともに不当な富の専有者として、市民的な社会秩序の破壊者として批判されている。貴族と資本

家とをこのように批判する『辞典』の立場は、明らかに、小ブルジョアの発展の志向性と資本主義に対する「反動性」とを併せもつ手工業者層の利害関心に接近している。むしろ、まさにこうした手工業者層の利害関心が「単純市場社会」への固執として『辞典』に投映されているのである。「単純市場社会」の執持が強調される場合には、資本主義社会はそうした社会の対立物として理解され、またその限りでこれは批判されることになる。しかし、資本主義社会がそうした側面でのみ理解されるならば、この場合、資本主義は一面的に理解されていることを意味する。つまり、『辞典』では資本主義が批判されているが、それは資本主義の全面否定ではないのである。換言すれば、資本主義に対する『辞典』の立場は、理念的にはそれを否定しつつ、客観的にはそれを肯定するのである。この矛盾がより明瞭になるのは、「単純市場社会」における営業制度が論じられる場合である。

市場社会がそれ自体として十分に機能しうるためには、「営業の自由」が確立されていなければならない。「営業の自由」はツンフト制の廃止によって実施される。ツンフト制の完全な廃止がまだ果たされていない三月前期において、「営業の自由」の問題は様々な形で議論をよんでいたが、この問題に対する『辞典』の立場は著しく微妙である。『辞典』は、一方で古いツンフト制が手工業経営の維持・発展のためにはや役立つていないという認識をもちつつ、他方でそれが手工業者を所有

者としてそれなりに維持させている点に注目している。つまり「営業の自由」の実施は、『辞典』の立場からは、手工業経営に発展の可能性を与えるものではあるが、ツンフト制に代わって所有権を保護する「労働の組織」Organisation der Arbeitが準備されていない場合、結局それは所有者による所有者の収奪の過程を発生させ、市民的な社会秩序の破壊にいたるとみなされた。従って『辞典』では、旧い伝統的なツンフト制の復活・強化が主張されることはなかったが、逆にまた「営業の自由」の実施に対しても、それがもたらす結果へのこうした危惧のために、これを積極的に要請しなかった。

それでは、所有権を保護し、資本の支配から労働を解放する「労働の組織」とは、一体、何か。それは具体的には「手工業者たちが工業所 Industriehalle」を設け、共働し、共同会計によって生産と販売を行なうこと、まつり分業の利点を利用すること<sup>(2)</sup>をめざす組織である。こうした組織を通して、手工業的な小経営につきまとう生産力的な低位性の克服が図られるのである。しかし果たして、これによって手工業はその所有権が守られ、労働が資本の支配から解放されるのであろうか。そうした組織は手工業経営が「営業の自由」に対応するための手段として提起されている。「営業の自由」はそれに見合った経済的な行動原則 Handlungsmaxime をそうした組織に要求し、組織は存続するために、こうした原則に従わなければならない。結局、手工業者はそうした組織を通して自ら資本家へと上昇せ

ざるを得ないであろう。「単純市場社会」を理想化する『辞典』が手工業者にこうした上昇を求めることは、明らかに自己矛盾である。しかしこの矛盾は、『辞典』の立場からすれば、「資本主義的に組織された工業制度の経済的長所と、その対立物すなわち資本主義以前のな仕方での生産し交換する手工業の社会的長所との評量の表現、換言すれば、両者の短所を消去する試み<sup>3)</sup>」であって、これ自体としては矛盾するものでなく、むしろこれは理論的な可能性とみなされたであろう。なぜならば、『辞典』においては、労働といえは独立生産者の労働だけが考えられていたのであり、資本については生産手段だけが考えられ、貨幣は交換手段と価値尺度の機能だけが観念されていたからである。<sup>4)</sup>

ゼグティスが指摘する、『辞典』に示される三月前期の西南ドイツ自由主義の資本主義に対する関係の二重性は、ほぼ以上のように整理されよう。

ところで、三月前期の自由主義の二つの要請、「単純市場社会」の維持と「資本主義的経営組織」の受容——政治的要請と経済的要請——は、『辞典』では統一・調和しようとみなされたが、客観的には対立し合うものである。ゼグティスは、この客観的に対立し合う二つの要請が同時に存在する点に西南ドイツ自由主義の特徴を認めるとともに、この自由主義がやがて相対立する二つの方向に分裂する所以をそこにみる。すなわち、一方は「単純市場社会」の維持に固執し、反資本主義的な立場

三月前期の西南ドイツ自由主義の二重性とその限界

を明確にする方向であり、他方は「資本主義的経営組織」の発展を肯定し促進する方向である。前者の社会的基盤は資本主義的發展とは異なる発展を指向する小ブルジョア層であり、後者の場合はブルジョア階級およびブルジョア化しつつある小ブルジョア層である。ゼグティスは、三月革命を挫折させる市民陣営の分裂・対立の背景にこうした二つの自由主義の対立をみる。それでは、西南ドイツ自由主義のこうした分裂性は如何にして克服されるか。これが次の問題である。

## (2) 自由主義と手工業

三月前期、手工業者層が自由主義の社会的基盤となったのは、自由主義が手工業者に代表される中産身分的社會層の立場にたち、彼らの利害関心を擁護する場合であった。事実、この時期には自由主義はこうした社會層の立場にたっていた。資本主義の意義を認め、その発展のために「営業の自由」の必要性を説く自由主義者も存在したが、多くの自由主義者は、手工業が資本主義的な経営組織を受容し、かつそれを活用して発展することを期待しつつ、「営業の自由」の即時無条件の導入に対しては、これが手工業に及ぼす結果を恐れ、批判的な態度をとった。ツンフト制の復活・強化を求めるとき、手工業者運動と自由主義運動とは出発点を全く異にするが、両者の間には携提関係ができあがった。自由主義と手工業との間のこうした関係は三月革命期まで続いたが、しかし革命の挫折とその後の資本主義の著しい発達とは情勢を一変させ、自由主義と手工業との

間の関係も変化させる。

自由主義陣営において、「営業の自由」の実施に対して批判的な態度をとるものは今や多数派ではない。ゼダティスはこれを一八五六―六六年に出版された『辞典』の第三版によって検証している。三月前期に出版された第一版の場合と異なり、ここでは「営業の自由」の実施は当然視され、「営業の自由」の下で資本主義が手工業と対立するという見解はほとんど消え去っている。こうした事態は、自由主義が手工業者に代表される中産身分的社会層の立場に立つことを止めたこと、つまり自由主義のブルジョア化が進行したことを意味する。ガルはこうした事態を「自由主義の墮落」とよび、それを否定的に評価したが、ゼダティスは自由主義のそうした変化をむしろ積極的に評価する。というのは、三月前期において自由主義者が自由主義者である所以は彼が中産的社会層の立場に立つことであつたが、自由主義のブルジョア化は、「営業の自由」の下でこそ手工業が資本主義的な経営組織を受容し発展しようという自由主義者の新しい確信を表現するものであるからである。従つてまた、ゼダティスは、自由主義者にとっては自分の立場が相い変わらず中産身分的社会層にあると主観的には考えられていたであらうとみなす。

三月以降期、自由主義陣営のこうした変化とならんで、手工業者の側にも変化が現われてくる。というのは、「営業の自由」の実施・ツunft制の廃止を求める声が手工業者の側からも聞

かれるようになるからである。ゼダティスは、「営業の自由」に対する手工業者のこうした態度の変化を「多くの手工業者が自ら作りも、望みもなかった諸関係への順応<sup>(5)</sup>」としてまず把握するからである。「ツunftは資本に対する防波堤としては役立っていないから、これは廃止しなければならぬ。営業の自由は事実上すでに存在しているから、これは法律的にも導入さるべきである。」<sup>(6)</sup>こうした現状認識によつて手工業者が全体として「営業の自由」を認めるにいたつたとするならば、彼らの態度の変化は現状の単なる追認を意味するにすぎない。従つてゼダティスは、そうした変化をもつて、「営業の自由」を積極的に求めるようになった自由主義の立場を、手工業が肯定しているのか、否定しているのか判断できないとし、三月以降期の自由主義に対する手工業者の姿勢を説明すべく、彼は手工業の経済史的検討に向う。ただしゼダティスは、「営業の自由」をめぐるこうした情勢の変化がバーデンとヴェルテンベルクの政府をして一八六二年にその実施にふみ切らせたとみる。

三月前期、バーデンとヴェルテンベルクでは人口の圧倒的部分が手工業と農業に従事しており、数字の上で社会は中産的な市民の社会の様相を呈していた。しかし、この中産身分的社会層の経済状態は著しく劣悪であり、彼らは市民的な社会秩序の担い手として著しく不安定な存在であつた。例えば、ロテッ

クは四〇〇グルデン以上の経営資金 *Betriebskapital* を所有する手工業者を中産身分的社會層に組み入れたが、実際にはそれだけの経営資金を所有する手工業者はほとんど存在しなかった。一八四四年のバーデンをとってみれば、経営資金を所有する手工業者は全手工業のうち五割ほどにすぎず、大部分の手工業者は経営資金を全く所有せず、いわば日雇層と変らぬ地位にあった。このように経済的に不安定な状態に置かれている手工業者に経済的な安定性を与え、彼らを中心として豊かで平等な「市民社会」をつくること、ゼグティスは三月前期の自由主義の課題がそこにあったと把握、従つてまたかかる課題の故にこの自由主義が「単純市場社会」の維持と「資本主義的経営組織」の受容という対立し合う二つの要請を併せもつことになつたとみる。

ところで、一八二〇・三〇年代にその発展の端緒が与えられた資本主義的工業は、三月革命後の政治的反動期に著しい発達をみる<sup>(7)</sup>。この発達には手工業者の経済状態を全体として改善させることはなかつたが、資金力のある一部の手工業者のなから、資本主義的な生産方法を採用し、その生産を遠隔地向け商品の生産に特化させることによつて資本を蓄積してゆくものを発生させた。従つてゼグティスは、この時期、手工業者に代表される中産身分的社會層はもはや統一的な利害団体を形成せず、利害関心を全く異にする二つの方向に分化しつつあるとみる。というのは、資本家と賃労働者とへの社會の全体としての

三月前期の西南ドイツ自由主義の二重性とその限界

二極化の過程が進行するなかで、手工業者も次第に中産身分的社會層としての歴史的规定性を失つてゆき、その利害関心は資本家あるいは賃労働者のそれへと接近してゆくからである。

ゼグティスは、十九世紀前半に開始した産業革命——彼自身の表現によれば「資本主義的工業の展開」あるいは「工業化」——は一八七〇年代半ばに終了し、資本主義が確立されたと把握し、更に彼は、資本主義の確立によつて手工業者が中産身分的社會層として存在しうる歴史的な前提条件が奪われ、従つてまたそうした社會層を社会的基盤とする自由主義が存在しうる歴史的な前提条件も奪われたとみなす。換言すれば、ゼグティスは、自由主義の小ブルジョアの方向とブルジョアの方向への分裂が資本主義の確立によつて克服されると把握するのである。それでは、こうした事態は自由主義と手工業との關係を如何に変化させるか。ゼグティスは、こうした事態がプロレタリア化しつつある手工業者を反自由主義の立場に追いやる可能性を認めつつ、「それによつて必然的に、小ブルジョアなかんずく手工業の自由主義との結びつきが全体として失われるということでは認めがたい<sup>(8)</sup>」と結論する。

最後にゼグティスは、こうした結論に基づき、一方で手工業者層・中産身分的社會層にファシズムの温床を見出すローゼンベルク H. Rosenberg やヴィンクラー H. A. Winkler の見解、他方で自由主義の崩壊を小ブルジョア層の解体と同一視するレヘルト F. Feuerhagen Leppert-Fogen の見解、これらとともに

歴史的な裏づけのない見解として退け、分析を終えている。(6)

(1) H. Sedatits, S. 40.

(2) Ebd., S. 45.

(3) Ebd., S. 47. ゼダティスのこうした整理が正しいとすれば、三月前期の自由主義は思想的にブルードンに接近しているのではないだろうか。旧歴史学派のひとりであって、三月革命期にはフランクフルト国民議会で自由主義左派の論客のひとりとして活躍したヒルデブランド Bruno Hildebrand がその主著『現在と将来の国民経済学』においてブルードンの『貧困の哲学』を積極的に評価しているのは、こうした点で重要であろう。森川喜美雄「ブルードンとヒルデブランド」、同『ブルードンとマルクス』未来社、一九七九年、を参照。

(4) 資本家、賃労働者その所得範疇としての利潤、賃金が把握されず、独立生産者だけが現われるのは、原始蓄積期の経済理論に特有なことである。小林昇「国富論体系の成立」『小林昇経済学史著作集I』未来社、一九七六年、を参照。

(5) (6) H. Sedatits, S. 104.

(7) ゼダティスは「産業革命」という用法を使用しない。しかし、彼は「資本主義的工業」の展開過程を「工業化」とよび、また一八七〇年代半ばに資本主義が確立されたと捉えている。ドイツにおける資本主義確立の時期＝産業革命の終期については議論があるが、本稿ではそうした問題には立入らない。なお、ドイツ産業革命の研究については、渡辺尚「ドイツ産業革命論に関する覚書」(一)『歴史学研究』三〇七、八号、一九六五、六六年、を参照。

(8) H. Sedatits, S. 193.

(9) H. Rosenberg, *Große Depression und Bismarckzeit*, Berlin 1976. H. A. Winkler, *Mittelstand, Demokratie und Nationalsozialismus*, Köln 1972. A. Leppert-Foggen, *Die deklassierte Klasse*, Frankfurt a. M. 1974.

### 三 三月革命期における自由主義

十九世紀西南ドイツ自由主義についてのゼダティスの把握はほぼ以上のように整理されよう。それはまた、次のように要約できる。彼は、三月前期の自由主義の社会的基盤である手工業者に代表される中産身分的社會層に注目しつつ、この自由主義の社会政策的・経済政策的主張における分裂性がそうした社會層の利害関心における分裂性に対応するものであることを論証している。すなわち、中産身分的社會層の利害関心は進歩的傾向とともに伝統的傾向を示す。三月前期の自由主義はそうした二つの傾向を自らの社会政策的・経済政策的主張のなかに併せもち、それによってこの自由主義は中産身分的社會層に独自の發展の方向——ブルジョア的・資本主義的發展の方向とは區別される小ブルジョア的發展の方向を指示する思想となっていく。しかし客観的には、小ブルジョア的發展の進行が資本主義の發達であり、中産身分的社會層に独自の發展というのは現実の資本主義の發達によって否定されざるを得ない。従ってそうした方向を指示する小ブルジョア的自由主義は、次第に伝統的傾向を解消してゆき、最終的に資本主義の發達を認めるブルジ

ョアの自由主義に変化するのである。

三月前期の自由主義に関しては、従来、政治的には自由主義であるが、経済的には伝統主義―保守主義であるという「政治と経済の不一致」の問題が呈示されるだけであつた。ゼダティスの独自のすぐれた視点は、この「不一致」を自由主義自体の問題として捉え、そうした自由主義を資本主義の展開をまだ十分にはみていない段階に対応した小ブルジョア的思想として把握する点である。これは、小ブルジョアの自由主義とブルジョアの自由主義との対立関係を強調することである。このこと自体は、三月革命の担い手である市民層の分裂・対立の思想的背景のひとつの局面を正しく捉えている限りで、十分に評価さるべきである。

それでは、三月革命は封建制を最終的に解体する市民革命として挫折に帰したが、自由主義の対立的な二つの方向への分裂が革命の挫折の原因となるのは何故か、また革命の挫折によってドイツ社会の近代化は如何に歪められているか。こうした問題に対する配慮が、ゼダティスには全くない。否、彼の問題の限定の仕方は、こうした疑問が生じるのを許さないのである。

ゼダティスは、三月前期を「資本主義的工業」が端的に与えられる時期とみなしつつ、基本的にはこの時期の社会が「単純市場社会」であると捉える。「単純市場社会」の中核となる手工業者に代表される中産身分的社会層の置かれている経済状態の劣悪さは、彼の場合、この時期の社会が「単純市場社会」

三月前期の西南ドイツ自由主義の二重性とその限界

であることを否定するものではなく、そうした社会層の経済状態の改善を図るという自由主義の基本課題の意義を確認させるものである。だが、「単純市場社会」とは一体どんな社会であるのか。マクファーンは、社会モデルを考えたとき、「単純市場社会」と「所有市場社会」との二つの市場社会モデルとは別にもうひとつの社会モデル「伝統的・身分制的社会」(customary or status society)を設定し、市場社会モデルが成り立つ前提は伝統的なもの、身分制的なものが存在しないことであると指摘している。事実、歴史的にも、市場社会が成立してくるのは封建制の社会的間隙においてであり、それが十分な展開をみるのは市民革命によって封建制が最終的に解体されてからである。<sup>(2)</sup>とすれば、ゼダティスが三月前期の社会を「単純市場社会」と捉え、自由主義の問題をそうした社会との関係において検討したということは、彼が問題をいわば市民革命以後のものとして限定したことを意味する。確かにこうした限定によって、彼は資本主義の発展・確立の過程における自由主義の在り方を正しく捉えることができた。しかしこの限定は、三月前期に封建制の解体過程が進行し、一八四八年にはその最終的解体がめざされたという歴史的現実を無視することであり、従ってまた自由主義の問題をこうした封建制の解体過程とかわからせる視角を彼から奪うことである。三月革命の挫折によって方向づけられる資本主義の特殊なドイツ的進化の問題性をおよそ念頭に置かず、一八七〇年代半ばにおける資本主義確立とそれに

ともなう自由主義の分裂性の克服を説くゼダティスの立場は、そうしたドイツの進化に果たした自由主義の役割(ドイツ自由主義のマイナス面)に注目した一九五〇、六〇年代の研究、こうした研究を踏まえて「近代化」の思想としての自由主義の系譜(ドイツ自由主義のプラス面)にも注目している。最近の研究、こうした研究水準からの後退であり、旧い伝統的史観への事実上の接近であると言わざるを得ないであろう。

さて、ゼダティスは三月革命期に「社会政策的・経済政策的レベルにおける自由主義の内部分裂が、自由主義的諸団体を、その政治的な決闘相手すなわち保守主義と国家とのおどろくべき連合にいたらしめた」と指摘するに止まり、「おどろくべき連合」が如何にして形成されたかを説明していない。しかし、われわれはそれを説明しなければならない。なぜならば、これこそ、封建制の解体過程に対する自由主義のかかり方を集約的に表現するものであり、従ってまたドイツ社会の近代化の方向が選択された時点で、自由主義が如何なる役割を果たしたかを十全に示すものであるからである。

三月革命期の市民層の小ブルジョア的な「民主派」とブルジョア的な「自由派」とへの分裂・対立を、ヴェルテンベルクの地域に限って詳細に検討し、その意義を示したランゲヴィーシ H. Dieter Langewiesche の研究は、自由主義の封建制の解体過程へのかかりを具体的に示している点で重要である。そこで本稿では、両派の革命理論とそれに基づいて実際に行なわれ

た三月革命の意義についての彼の見解を要約し紹介し、自由主義の分裂が封建制の解体過程においてもった意義の解明への手がかりとする。

ランゲヴィーシエは、三月革命の意義を「フランスのモデルの不首尾な模倣であるばかりでなく、このモデルを、この間に達成された政治的・社会経済的な発達状態に合わせるように修正しようとした試み」と捉え、この革命を「半革命」eine halbe Revolution として特徴づけている。その意味はこうである。

ドイツの市民層はフランス革命を通して近代の革命概念を獲得するとともに、その制限と部分的な忌避とによって自己の革命理論を作り上げた。<sup>(6)</sup>「自由派」は、フランス革命が市民層を政治的に解放した点にのみ注目し、「改良としての革命」Anti-Reform-Revolution ともいえる理論を確立した。この理論に基づけば、革命の目標は、君主制の廃棄・封建制の最終的解体を通して新しい国家・社会を形成することではなく、封建的な旧体制のなかに市民層を政治的に統合することにある。「民主派」も社会革命を拒否し、革命を政治革命だけに限定した。しかし、「自由派」とちがつて「民主派」は社会革命の意義を自己を否定したのではなく、社会革命に代わるものとして平和的な社会進化に期待したのである。両派は、ともに革命を政治革命に限定している点で、政治的には基本的に同じ立場にある。しかし、「民主派」が社会進化の前提として共和制的な国家形態と民主主義的な選挙法との必要性を強調するときには、「自由派」



との政治的対立が激しくなる。なぜならば、「自由派」の立場からすれば、自由主義的な三月政府が樹立された時点において、革命の目標はすでに達成されたとみなされるのであり、「民主派」のそうした要求は社会革命を指向するものとして映ずるのである。「自由派」は、社会革命への移行にともなう政治的不安定が経済活動の停滞に帰結することを恐れ、君主と共同して秩序の維持をはかることになる。「民主派」は、「自由派」とのこうした政治的対立のなかで、政治的な支持層を広げべく経済問題（保護関税の要求等々）に専念してゆくことになる。だが、こうした非政治化は、「民主派」の意図とは逆に、市民全体としての政治力を弱めることになり、結局、政治的行動をよぶことになるのである。

以上より明らかとなるのは、まず「自由派」について言えば、封建制の下ですでに一定の水準に達している「産業化」とそれに基づくブルジョアジーの経済力の上昇を前提に、ブルジョアジーの政治参加権を官憲国家に求めたのである。そこでは封建制の最終的解体は全く問題にされず、政治に参加することによっていっそうの「産業化」を達成することだけが問題となっている。それに対して「民主派」は、社会革命に対しては社会進歩の道を選んだが、封建制の最終的解体によって小ブルジョアの発展の方向を期待したのであった。ところがこの小ブルジョアの発展の方向は、先述したごとく客観的には資本主義の形成展開にいたるのであるから、こうした立場は、歴史的にみ

三月前期の西南ドイツ自由主義の二重性とその限界

れば、まさに「近代化」の思想を代表するものであるといえるであろう。<sup>(7)</sup>

(1) ゼダティスは、「単純市場社会」と「所有市場社会」だけを問題にして、「伝統的・身分制的社会」については全く言及していない。

(2) 大塚久雄「欧州経済史」『大塚久雄著作集』第四巻、岩波書店、一九六九年、を参照。

(3) H. Sedats, S. 117-8.

(4) Dieter Langewiesche, *Liberalismus und Demokratie in Württemberg zwischen Revolution und Reichsgründung*, Düsseldorf 1974.

(5) *Ebd.*, S. 102.

(6) ドイツ市民層における革命概念の制限・忌避について詳しくは Michael Neumüller, *Liberalismus und Revolution*, Düsseldorf 1973, を参照。

(7) 「近代化」と「産業化」とを区別して使う用法については、大塚久雄「近代化と産業化の歴史的関連について」『大塚久雄著作集』第四巻、岩波書店、一九六九年、を参照。

### 小括

三月前期は封建制の解体（市民革命の問題）と資本主義の発展・確立（産業革命の問題）との重疊的な過程が進行した時期である。この重疊的過程に直接にかかわりをもつ中産身分的社会層を社会的基盤とする自由主義は、従って、封建制の最終的

解体と資本主義の確立という二つの課題を同時にもつことになった。ところで中産身分的社会層はそうした二つの過程にすべて等しくかわるのではなく、小ブルジョア層とブルジョア層とに区別される。すなわち前者は、小ブルジョアの發展を追求する限りで、封建制の解体『近代社会の形成に深いかかわりをもつが、ブルジョア化とは区別される小ブルジョアの發展の方向を指向する限りで、資本主義の發展に対しては批判的となった。それに対し後者は、資本主義的工業發展の担い手としての歴史的規定性をもつが、資本主義のそうした發展をすでに可能にしていた当時の封建制に対しては妥協的となった。中産身分的社会層の内部がこうように分化していることは自由主義を、課題を異にする二つの方向に分裂させ対立させることになる。

こうした自由主義の分裂・対立は、三月革命期には革命それ自体の位置づけの相違・対立として現われる。すなわち小ブルジョアの自由主義は、政治革命とそれに続く社会進化によって封建制を最終的に解体し、近代社会を形成しようとする。それに対しブルジョアの自由主義は、封建制の最終的解体の問題をおよそ念頭に置かず、もっぱら経済的に、資本主義的利益状況に問題を限定することによって、政治的には政治革命を通してブルジョアジーの政治参加の道を開くことだけを問題にする。結局、次のように言うことができよう。ドイツ近代史上、小ブルジョアの自由主義は「近代化」の思想として、ブルジョアの自由主義は「産業化」の思想として機能し、三月革命の挫折は後

者の勝利を意味し、かくして反動期に「上からの近代化」が推進され、西南ドイツ自由主義のこうした特徴はプロイセン主導による第二帝制の成立によって一層強化されてゆくことになる。